



JAPAN HERITAGE
日本遺産

さいくうあと通信

発行：明和町 齋宮跡・文化観光課（三重県多気郡明和町大字齋宮2811）
電話：0596-63-5315 E-mail：saikuuato@town.mie-meiwaga.jp



午年にちなんだ「駒」の話

新年あけましておめでとうございます。本年も齋宮跡・文化観光課をどうぞよろしくお願いたします。本年の干支である午に関わる明和町の文化財的な話題をご紹介します。

江戸時代の齋宮村に関わる個人所蔵の古文書「御分間御絵図御用村方御案内口上之覚ごぶんけんおんえずごようむらかたごあんないこうじょうのおぼえ

（享和3年-1803）の中に以下のような記述がみられます。

当村名所旧跡之事

旧地之森、上藪、西王宮、下藪、楽殿、鈴池、絵馬、黒木の鳥居、紅葉森、有明池、笛川橋、盃、袖追の庄、**駒見所** 名所 蛭の沢花あやめ

史料は幕府の役人に当時の村役人が齋宮村に関わる寺院や神社、名所・旧跡を説明するために書き出した内容となっています。史料中の「西王宮」は現在の齋王の森、「旧地之森」は現在の竹神社にあたるなど、江戸時代の齋宮跡周辺の様子が分かる貴重なものです。

記述内容の一つ一つをご紹介しますところですが、今回は午年ということで「駒見所」に注目してみましょう。実は「駒見所」という名所は明和町史やさまざまな地誌にも記載がなく、場所や由来もよく分かりません。

しかし、同じく個人所蔵の絵図で齋宮村を含む神領五ヶ村の様子を描いた「御神領五ヶ村惣絵図」ごしんりょうごか（天保8年-1837）に手掛かりを見つけることができました。

絵図には伊勢街道や街道沿いの家並み、道や用水などが克明に表現されているほか、齋王の森など名所の部分に朱色で丸印が付けられており「朱ハ旧所式内等」と説明書きがなされています。絵図の中でも東の方に朱丸と共に「駒見所」と記されています。その場所は、圃場整備が進み、かつての地形がわかりにくくなっていますが、戦後直後の航空写真と絵図の道を整理すると、現在の勝見集落の北東、笹笛川周辺だと考えられます。

「駒見所」の場所は絵図によりおよその特定ができましたが、どんな由来があるのか、次ページでもう少し推理してみたいと思います。



「御神領五ヶ村惣絵図」（個人所蔵）
* 該当部分拡大



大淀地区には「^{こまいたり}駒至」という小字が確認できます。加えて、大淀には「駒」や「馬」にまつわる伝承地が点在しています。

・^{こまよけ}駒除の池：『大淀名勝誌』によれば、在原業平が斎王と一緒に大淀にやってきた時に、草刈りをする農夫が一行を避けて馬を池のそばに引き入れたことを見て「^{あさちふ}浅茅生に賊の草かる道せばみ行きこう袖に駒よけの池」と業平が詠んだことにちなむとされています。

・^{うまとどめ}馬止：『大淀名勝誌』によれば、業平が馬を止め、船に乗ったからと紹介されています。これらの伝承は、『伊勢物語』の主人公ともいわれる在原業平に関連している点が共通しています。他にも大淀には日本遺産の構成文化財である「業平松」の伝承も有名です。町内に残る在原業平関連の伝承を集めてみると他にも以下のものが確認できます。

・^{くるまやどり}車宿：『大淀名勝誌』によれば、斎王が在原業平との別れを惜しみ大淀までやってきたときに車を止めたところと紹介されています。

・笛川：『斎宮村郷土史』には、笛川のほとりで在原業平が小笛を吹いて斎宮寮の女官を誘い出したという俗説を紹介しています。



< 関連伝承地・地名図 >

①：笛川橋

②：「駒見所」 * 推定地

* 現在の笹笛川の流路は、昭和の河川改修によるもので、江戸時代は駒見所周辺は流れていません。

③：大淀小字「駒至」

④：駒除の池 * 推定地

* 『神三郡神社参詣記』には池とともに「駒除の松」という記述も見られます。

⑤：車宿 * 推定地

a：『神三郡神社参詣記』より推定

b：『大淀郷土史』より推定

⑥：馬止 * 推定地

⑦：業平松

* 推定地としたものは、明確な場所は特定できていません。

これらの伝承地や地名を地図に落としてみると、斎宮地区から大淀地区にかけて点在している状況です。そして、今回取り上げた「駒見所」は斎宮地区と大淀地区の関連地を結ぶように位置しています。「駒見所」の詳しい由来は解明できませんでしたが、在原業平に関わる伝承の一つであった可能性を考えておきたいと思います。仮にそうであれば、江戸時代の人々が業平や斎王が斎宮から大淀へどこを通過していたとイメージしていたか考えるヒントにもなるかもしれません。

斎宮・斎王に関わる伝承は、斎宮跡だけでなく、明和町全域にまだまだ眠っているかもしれないことをご紹介します。干支の「午」・「駒」にあやかって、今年も「こま」ごまとしたことまで丁寧に準備をし、事業や調査研究を万事「うま」く進めるぞという決意を込めて今年最初のさいくうあと通信といたします。